

一生の宝物

小坂井中・3 中西 凜々花

受験まであと約五か月。春には高校生になって、新しい制服に新しい友達、部活は何にしよう。高校卒業後は、進学して、医療系に就職して、結婚したら子供は何人生まれるかな。おばさんになって、おばあちゃんになるまで、私の人生は当たり前前に続いていくものだと思うっていた。

本屋さんでたまたま目にした「よめぼくシリーズ」の本。私は何気なく手に取った。高校生で余命八十八日。これを知ったとき、何を考えただろう。怖い、悲しい。まさか自分の人生が十数年で終わるなんて、考えもしなかっただろう。

「余命八十八日の僕が、同じ日に死ぬ君と出会った話。」

この本を読んでいて、私が毎回考えることがある。それは、私も余命を知ったら、どうなるのだろうか。私はきつと、死ぬまでにやりたいことを全てやるのだと思う。友達にも、余命のことを隠さないで話すと思う。けれど私は、普段から死ぬことが怖いと思っ

て生きているから、その日が近づくにつれて、恐怖も不安も大きくなっていくのだろう。

この本の主人公である光は、ひよんなことから、自分とクラスの人気者の莉奈が、余命があと八十八日であることを知ってしまう。光は莉奈に、余命を伝えるべきか悩むが、結局最後まで伝えないことを選んだ。

もし、私が光の立場だったとしても莉奈には内緒に思う。余命を知りたい人、知りたくない人はそれぞれだから、もし莉奈が知りたくない派なのに教えてしまうと、落ち込んだり、病んだり、病んだりしてしまうと思うからだ。残り少ない命を、友達がそん

な気持ちで過ごすのは、もったいないと思う。莉奈がもし光から伝えられていたら、どうなっていたのか分からない。しかし、私がもし友達に余命を教えられていたら、もうすぐ死ぬ現実を受け止められず、恐怖と不安で気分が沈んだまま、最期のときを過ごすのだろうと思う。

私は余命なんて知らずに、楽しく明るい心で、今を大切に生きたい。では、私の友達はどう思うのだろうか。気になったので、友達にアンケートで、余命を知りたいか知りたくないかを聞いてみた。結果は、四十八人中、知りたい派が二十六人、知りたくない派が二十二人。若干知りたい人のほうが多いけれど、ほぼ半々と分かった。私と反対の意見である知りたい派の人の理由は、残りの寿命を悔いなく生きたい、やりたいことをいっぱいやりたいというものだった。私はそれを聞いて、死ぬ現実が受け入れられたならそう生きたいと思うけど、受け入れられないと生きるのが辛くなりそうだと思った。知りたくない派の人の理由は、怖い、いつ死ぬか分からないからこそ今を大切に、がむしやらに生きられる、という私に似た意見の人が多かった。やはり人によって、知りたい、知りたくないというのも違うし、その理由もそれぞれ違うのだと改めて分かった。私は今まで、人それぞれ考え方が違うことは分かっていたつもりだったけれど、友達にアンケートで協力してもらって、改めて実感できた。

また、光は人生に見切りをつけていたとはいえず、余命宣告をされても大して落ち込まない強い心があつて、本当に素敵な人だと思つた。私は、小学生のとき、ミニバスケットボールクラブに入っていた。練習に励み、Aチームに入り、センターとして試合にも沢山出られるようになった。六年生になり、これからは自分たちの世代、副キャプテンとして、大黒柱になるぞと意気込んでいた矢先、腰の怪我により、チームを離れることになった。楽しみにしていた大きな大会の直前だった。何で今なの、何がいけなかったのと、とても悔しかったし、落ち込んだ。その後、友達に誘われてダンスを習い

始めることになった。今では、新しい「楽しい」に出会うことができたが、最初はともつらなかった。この経験を思い出すと、光の強い心にはとても尊敬するし、そんな風に自分もなりたいたいと思う。

このシリーズの本を読むたびに、命の尊さや大切さ、普通に日常を過ごすことのできるありがたさを感じることが出来る。美味しい物を食べられること、あたたかい布団で安心して寝られること、学校で友達とおしゃべりをする事、大好きなダンスを踊ること。当たり前のように過ごしてきた日々が、自分にとって、実はとても大切なものだったのだ。そして、それらはすべて命があるからこそ、紡がれる毎日ののだと思う。一生の宝物である命を大切にし、つらいことや悲しいこと、あきらめなくなるように生きていきたい。前に進めるような強い自分でいられるように生きていきたい。

「人生は一方通行であと戻りができないからこそ、皆前を向いて頑張って生きているんだよ。」

この言葉を胸に刻んで。